
嫉妬する心臓

林茶々丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嫉妬する心臓

【Nコード】

N0908Z

【作者名】

林茶々丸

【あらすじ】

心臓病を持つ少女と健康な少年の愛……を揶揄するネタのつもりが、中途半端にいい話(?)

前

ある日、彼の手にはどこかで拾ってきたらしいプルタブがあった。待ち合わせた公園でベンチに座するとすぐ、彼はもったいぶりながらそれを取り出した。

「昨日決めたんだ。おれ、大きくなったら依子と結婚してあげる。ほら、その証拠にダイヤモンドの指輪を持ってきたよ。依子にぴったりだろ。」

「えーっ」

それはどう見てもプルタブだった。下から見ても、横から見ても、何かがついている様子はない。顔を近づけて覗き込んだら、彼の手からは石鹸のにおいがした。一応洗いはしたらしい。

「安っぽいよ」

「ダイヤだと思えばダイヤになるんだぜ」

「暗示なんかかからないし」

私がすねると、彼は困ったように笑い、プルタブを公園のゴミ箱へ捨てた。たぶん、拾ったのもあそこなのだろう。

別の日、彼の手にはネジについているような金属の輪があった。消毒液と食事とかすかな排泄物の臭いが混ざりあった空間で、彼のまわりだけほんのり明るく見えた。

「今度はルビーの指輪だよ。」

と彼は胸を張った。

「どこが？」

「ほら、見てみろよ。」

私。輪。窓。窓の外には夕焼け。どうやら、真つ赤な太陽が輪に載るよう、ルビーに見えるよう、彼は角度を変えているようだった。しかし、窓際の椅子に立っている彼と、ベッドに座っている私とは、目線の高さが違う。

「私からだ窓の桟しか見えないよ。何をやりたいのかはわかるけ

ど」

彼はしゃがみこみ、ため息をついた。私と同じ景色を見ているだろう。青から赤へのグラデーションがわかるのみに、夕日そのものは見えない。

「本当だな。これも失敗か。」

「でも、この前のダイヤよりはよかったよ」

私はそつと言つてあげた。

あるときは、巨峰の粒と枝で「大粒ブラックパール」を。別の時には、青空を映すガラス窓の雨粒で水晶を。別の時には、青信号のエメラルドを。指輪ネタが尽きたら、味噌汁に入っていたアサリの貝殻でネックレスを製造してくれた。

「依子にあげるよ。約束だ」

彼はえくぼを見せて笑ってくれた。

当時はその日々がどれほど輝いていたかなんて、少しもわからなかった。過ぎ去ってみれば、彼のことが懐かしくてたまらない。掘ねていた自分を思い出せば甘酸っぱい気持ちになる。

「いつか本物をあげるよ」

「別にいらないし」

ものなんていらなかった。彼さえいればよかった。

生まれつき心臓に病気を抱えていた私は、ほかの子供と走り回ることができなかった。親の勧めで緑の多い公園に行っても、座って絵本を読んだり、絵を描いたりすることが多かった。

その公園の常連だった彼は絶えず走り回っているような子で、仲間に入ろうとしない私を不思議に思ったらしい。

「おれのこととはチョコラって呼んでくれ。一緒にケイドロをやらうぜ」

「興味無い」

「感じ悪いなあ」

「別にいいじゃん」

親や病院のスタッフから大事にされていた私は、ほかの子供と付き合うことが下手だった。率先して私を遊びに誘った彼のことも、偽善者だとかいい子ぶっていてムカつくだとか、そんな風にとらえていた。

「私は病気なの。走れないの」

「ふーん。そういえば顔がなんか白いな。了解」

それ以上聞くこともなく、彼は遊びの輪に戻っていった。同情されることや詮索されることを予想していた私は、拍子抜けしてしまった。今でもよく覚えている。

彼と二度目に口をきいたのは、病院だった。ぜんそく持ちで入院している友達の見舞いに来たという彼は、定期健診で来院した私を見つけ、すぐに誰だか思い出してくれた。犬のように駆けよってくる彼を見て、私のよわつちい心臓は高鳴った。

「まじで病気だったの？」

「そうだよ」

「どこの病気だったけ？」

「心臓」

横にいた母が私を守るように一歩前に出た。ありがちな話ではあるが、母は過保護な人だった。大変だ大変だと言いながらも、私の世話に生き甲斐を見出し、自分の目が届く範囲に私をおきたがった。母の目は、彼の保護者を、彼に「かわいそうな人への言葉の掛け方」を教えるべき人間を探してもいた。

「そっか。俺の名前は覚えて？」

「えっと、チヨコラだったけ？」

「正解」

彼はキツネみたいな目を皿に細め、にんまりと笑った。彼の笑顔はチシャ猫に似ていた。裾にしみのついたＴシャツを着て、裸足にスニーカーを履いている彼。小花模様のブラウスにひざ丈のスカートをはいている私。少しも似てはいなかった。

「何でチヨコラなの？」

「こういう字を書くんだ」

彼はポケットからハンカチを取り出し、母親に書いてもらったらしい名前を指差した。そこには、「新明治樹」とあった。

「まん中の2文字を取ると、チヨコレートだろ？でもチヨコだつまらないから、怪獣っぽくラをつけたんだ」

「へえ」

「だから、チヨコラって呼んでいいぜ」

「わかった」

母は口を挟まず、私たちの様子を窺っていた。心配しなくても彼と親しくなることはないはずだと、私は心の中で母に語りかけた。

けれど、彼は私に興味を持ち、私は初めてできた友達を拒むことなんて考えられなくなっていた。

チヨコラは私の1歳下だった。公園で見かけるたびに話かけるという関係が1年ほど続いただろうか。私の病気は、最終的には心臓移植しか治療法がないということをお教えたら、

「おれの心臓をあげるよ。使い終わったらだけど」

と軽く言ってくれた。安易な同情ではなく、

「でも、おれのだと合わないかもしれないな。依子の心臓はきつと小さくてとげとげしているだろうから。俺の心臓はあったかくて大きいんだぜ」

と冗談にしまうのが彼だった。

もちろん、彼は私の健康も願ってくれた。小学校で書かされた七夕の短冊や、家族と出かけた初詣では、私の心臓について願をかけしつたらしい。

「おれは日ごろの行いがいいから、きつとかなうぜ」
と胸を張ることも忘れなかった。

「私は日ごろの行いが悪いから駄目だってこと？」

「ひねくれよりこ」

彼は私の鼻をつまんだ。びっくりしてひゅっと息をのめば、すぐに察知した母親が駆けつけてくる。

「依子は体が弱いんだから、驚かすようなことはしないで」

「あ、すんません」

「大丈夫だつてば」

「本当に？」

母は私の肩をつかみ、顔を覗き込んできた。

「うん。だから、チョコラと遊ばせて。ね？」

少しびっくりすることにも慣れた。大きな音を聞かないように、走らないように、興奮しないように。刺激から遠ざかっていた私は、なんてつまらない人間だったのだろう？お腹が痛くなるくらいに笑うことや、驚いて飛び上がることを、彼には教えられた。

「免疫がつくからいいんじゃないか？」

「でも……」

「依子は生き生きしているぞ。長く生きられないのなら、少しでも楽しい子供時代にしてあげたいじゃないか」

父はそう言つて、心配する母親をなだめた。

優しくてひょうきんな男の子は、私の初恋だったのかもしれない。だが、私の引越しによって温かくもはかない関係は終わりを告げた。

彼との再会は、一つの事故がきっかけだった。ぼんやりしていた母が、彼の運転する車に追突してしまったのである。幸いどちらの車も大して傷はつかなかったのだが、助手席に乗っていた私が驚いて胸を押さえたため、母は動転してしまった。ぶつけられた側も、青い顔をしている私を見て青ざめた。

「大丈夫です。すぐに収まりますから」

情けない声を出して笑い、顔をあげたとき、私は目の前に立つ彼の顔に懐かしい面影を見出した。

「あ」

「本当に大丈夫ですか？病院まで送りましょうか？」

「いえ。あの、それはさすがに悪いです」

見れば見るほど、間違いないと感じられた。

それまで、少しでも似た人を見かけるたびにチヨコラを思い出していたが、写真は一枚も残っておらず、その顔はぼやけたものになっていた。だが、会社帰りらしいスーツ姿の彼を見た瞬間、記憶がよみがえった。

「新明さん、ですか？」

「はい。あれ？知り合いましたか？」

彼は少し姿勢をただした。取引先の人間とか上司の娘とか、推測したのかもしれない。私はすぐにわかったのに、彼は気付かないのだ。さびしいことだったが、私は静かに種明かしをした。

「芳川といいます。昔、よく遊んでもらいました。○×公園で。あの、チヨコラくんですよね？」

「昔？……ああ。依子ちゃん」

「はい」

「うわあ。すごーい偶然だ」

彼はあのなつっこい笑みを見せてくれた。私も自分の顔がゆるむのを感じた。ついでに、少しだけほが熱くなった。

「そっといえばそんな子もいたわね」

母は複雑そうな顔をした。

私のために、同じ病気で苦しむ子を持つ親のサークルに入ったり、病気への理解を求めて教師に交渉したり、母は忙しく生きてきた。私が関係しないことにおいてはドライな人でもあって、彼の口座へ修理費用＋αを振りこむ以上のことをしなかった。

「菓子折とか持っていけないの？」

「行きたいの？」

母は怪訝そうな顔をした。

「うん。昔の話とかしたいし」

「あのころは男女の別なく遊んでいたかもしれないけれど、もう20代半ばなんだから。近づいてこられても重荷に感じるだけだよ。もう恋人もいるでしょうし」

「そっか。そうだよな」

母はやっぱり私に忠告した。病状の悪化と内弁慶の性格により、私は当時働いていなかった。時折家事を手伝うくらいで親には許されていたけれど、やっぱり自信は持てなかった。

「普通に働いている男性からしたら、面倒な相手だよな」

「そうよ。浮かれちゃだめ」

私はその言葉を重く受け止めた。

私は身を引くつもりだったのだ。でも、彼は私を見つけてくれた。毎月の検診を終えて病院で会計を待っていたときだ。私の前に現れた彼は、そつと握りしめていた左の手を開いた。

「これ、引越す前にあげようと思っていたんだけど、渡しそびれていたんだ。この数日家の中を探し回って、ようやく見つけた」

彼の手にはクジラをかたどったブローチが乗せられていた。

「家族で行った水族館で、俺の小遣いでも買えて、依子にも似合いそうなものって、これくらいしかなかったんだ。でも、最後に会ったとき依子はすごいおしゃれをしていただろ？」

記憶をたどり、ちょうど祖母の家に行った帰りだったことを思い出す。母は、父方の祖母に私をみせるとき、少しでも顔色がよく見えるよう、飾り立てるのが常だった。確か、ピアノの発表会でもあるかのような、白いタイツ・エナメルの靴・唇には色つきリップ・レースのシュシュなんていう、ごてごての格好をしていたのだろう。

「ああ」

「なんか、こんなものじゃ駄目だって弱気になってさ。でも、今なら思い出として大事にしてくれそうな気がする」

「ありがとう」

私はサマーセーターの胸にそれをつけた。

それから始まった彼との交際においても、私は最初のうち積極的になれなかった。おもにメールでのやりとりをしていたのだけど、

「この時間は働いているに違いない。後にしよう」

「疲れている彼にこんなメールを送ってはいけない」

「彼の同僚は、『病気の女にボランティアで付き合っただけで優しい奴』とでも思っているのだろう。私のことがネタにされているのかもしれない」

といった思いにとらわれ続けていた。

彼は3人兄弟の長男で、にぎやかな家に育ったという。時々話してくれる子供時代のエピソードは、私にとって別世界だった。

「男3人で狭い風呂に入って、お湯が半分以上なくなるほど騒ぎまくった。フルチンで、庭先のビニールプールに入っている恥ずかしい写真がある。依子は免疫がないから、見たら真っ赤になるかもな。休日に昼まで寝ていると、母親に、けつを蹴ってたたき起こされたんだぜ。乱暴な母ちゃんでさ」

彼がそんな家庭を築きたいと思っているのなら、私には無理だろう。いつも、こわばった笑みを返していたと思う。

彼は、もともとの性格なのか、あのころを懐かしむ私に会わせてくれているのか、冗談やイタい発言で私をよく笑わせてくれた。

「最近、ドナーカードを持つようになった。家族にも意思は伝えている」

「実のところ、依子の病気がってどれくらい重いのか？ 話すのがしんどかったら無理に教えてくれなくてもいいけど」

といった話になることはまれで、テレビや漫画や言葉遊びや、たわいもないことを話すことが多かった。話し上手で、彼と別れて自分の部屋に戻るとき、あまりの静けさと空虚さで、胸と耳が痛くなった。

やりとりを続けるうちに、私の気持ちもほぐれていった。大事にさ

れているのだと思うほどに、私は温かな気持ちに満たされた。

「20歳までは生きられないなんて言われたこともあったけれど、この年までやってこられたんだよ」

「このまま10年先も20年先もいけるんじゃないか？」

彼が笑いながら言ってくれると、そんなこともあるんじゃないかと言う気になった。

「チヨコラがそばにいてくれればね」

「おうよ」

逆プロポーズみたいな言葉も、自然と口からこぼれてしまうのだった。

彼の車で何度か日帰り旅行に連れて行ってもらったこともあったけれど、キス以上の関係になることはなかった。

「私に魅力がないからじゃなく、体のことを気遣ってくれているんでしょう？」

「おれに魅力がないからじゃなく、体のことが不安なんだろう？」

彼は笑いながら言い返してきた。

「そんなに大変なこと？」

「そりゃ、最初はひどい痛みだというし、歯を食いしばるんじゃないかな。慣れてきたらそれはそれで、心臓には悪そうだな」

「えっと。そうなの？」

「結構ハードな運動だし」

経験豊富なのだろう。私と付き合う前は、きっと、気軽にベッドへ誘えるような女が一緒にいたのだろう。

暗い気分になっていると、彼は急にまじめな顔になった。

「俺は、依子が元気になるまで待つよ。絶対にドナーは見つかる。そして、依子を俺だけのものにするんだ。」

「え？」

「嫌？」

私は首を横に振った。

「早くそんな日が来てほしい」

彼は力強くうなずいた。

キスだけの関係だったけれど、彼の横は居心地がよかった。彼と一緒にいる未来を、思い描くことができるようにもなっていた。24歳の私は満たされていた。

後

夏生まれの私は、誕生日に蝉時雨を聞く。何歳になっても、それは変わらない。隣にいる人が変わっても、蝉は同じように鳴く。

いつものように出勤した誕生日だったが、事務所のメンバーが昼休みにケーキを用意してくれていた。

「とうとう30大台にのっちゃった」

「何言ってるのよ、依子」

「いたっ」

思いつき背中をたたかれた。

「美香。手加減してよ」

「病弱なふりはやめなさい。健康そのもののくせに」

「依子の新しい人生が始まってから、まだそんなに経っていないでしょ？まだまだこれから勝負だって。30歳で後がないような言い方をしたら、こっちのおばさんたちが怒っちゃうよ」

30代半ばで独身の先輩たちが、わざと腕を組んで怒った顔を見せた。職場で一番仲のいい美香はすでに包丁を手にしていて、ケーキを切り分ける気満々だった。さっき私の背中を叩いた時も包丁を持つていたのだろうか。恐ろしい。

「すみません」

「わかればよろしい」

社員30名に満たない小さな会社は、とても温かい。

心臓移植手術が成功して数年、私は普通に働けるまでに回復していた。美香という、休日に遊ぶこともある素敵な友達を見つけることもできた。この春には新しい子が入ってきて、物を教える立場にもなってしまった。

美香の言うとおり、新しい人生が始まっていた。

ケーキのお礼を言って事務所を出ると、熱気に体が包まれた。後

ろから美香も出てきて、ポンと肩をたたかれる。

「何かプレゼントするよ。今から雑貨屋に寄ろうか？まだ18時だし」

「ごめん。今日は彼と会った」

「おっ。それは失礼しました」

美香はにんまり笑い、いきなり私の耳に口をよせた。

「体も丈夫になったし、そろそろ、エッチなこともさせてあげたら？」

「いつ、いきなりそんなこと言わないでよ。30歳にもなってそんな、少女マンガの女子高生同士みたいなやりとりなんて」

「だって、新しい依子になってからはまだ若いんだし、恋愛はビギナーでしょ。初々しくてもいいじゃん」

「でもさ」

「からかうと面白いんだから。じゃあ、お疲れ様」

美香は楽しそうに指に引つ掛けた鍵を振り回し、車へ向かって歩いていった。私も、就職記念に親からプレゼントされた中古の軽自動車へ足を向けた。

「ごめん。待たせた？」

「ううん。私も道に迷っちゃって、今来たところ。ジュン、すごい汗だね。もしかして走ってきたの？」

「こんなに混んでいると思わなくてさ」

彼は鞆からタオルを出して額や首の汗をぬぐった。今日もしっかり仕事をしてきたらしく、彼の勤める会社で製造している塗料の臭いが、かすかに漂ってきた。付き合い始めのころはシンナーに近いそのにおいが鼻についたけれど、今では彼の一部として愛おしく思っている。似たにおいをかぐたびに彼を思ってしまう。

「ありがとう」

「ん？どうってことないよ」

彼は照れたように笑った。

楯野樹は、数か月前から付き合っている恋人だ。きっかけはナンパだった。美香と二人で映画を見に行ったとき、

「ケーキバイキングのチケットがあつて、1枚で4名まで有効なんだけど、よかつたら一緒にどう？」

と誘ってきたのが、ジュンとその友人だった。

美香と相手はあまり気が合わなかったらしく、1回きりで分かれてしまったが、ジュンと私は続いている。私は、これを逃したら二度と男性と話す機会がないような気がして、自分からアドレスを聞いてしまった。浮かれていたのかもしれない。

ナンパするような男だからと美香は注意してくれたが、ジュンはどうやら当たりだった。私の体を気遣ってくれるし、こうやってデートのために走ってきてくれる。

彼の汗があまりにひどいので、私もハンドタオルを出して首を拭いてあげた。ふいにその手をつかまれ、彼の顔が私の顔へ近づいてきた。少しためらったのち、彼が私の唇に唇を押しあててきた。キスした途端、胸が苦しくなった。あの、発作が起こる前の嫌な感じ。体中の血が引いていく感じ。

「うっ」

「まだ無理だった？」

私は必死で首を横に振った。

「違うの」

「そう。驚かせちゃったかな」

彼はポリポリと頭をかいいた。

「う、うん。そうかも。人のいるところでされると、ちょっと恥ずかしいし。早くご飯食べに行こうよ」

心臓は治ったはずだった。健康な心臓がこの胸に入り、規則正しいリズムを刻んでいるはずだ。もうなんの問題もないはずだ。

彼と食事している間も、私は時折胸に違和感を覚えていた。

その日から、私の心臓は私のものではないような振る舞いを始めた。

人前でキスした1カ月後だった。照明を落とした彼の部屋で、私は傷跡を初めて家族以外に見せた。手術のあとは痛々しいほどはつきりと残っていた。

「隠さなくていいよ」

「でも、なんだか気分が乗らなくなるんじゃない？」

「おかげで依子は命が助かったんだろ？そう思えば、この傷も愛おしいよ。傷に感謝したい気分だ」

彼はそつと傷を撫でた。

「本当に、いいんだよね？」

「うん」

私ははつきりうなずいた。彼の鼓動は私のものより早かった。

彼の手が私の下着に触れた瞬間、波打つように胸が動いた。

「ひゃっ」

「な、なんだ？」

あばらの間で、皮膚がぐにゅぐにゅと芋虫を思わせるゆっくりとした動きで震えていた。自分で見ても気持ち悪いし、彼もびっくりして数センチ後ずさった。

「自分でもわからないの」

「心臓？」

「え？でも」

急に心臓がギュッと絞られた。息が苦しくなり、体を折り曲げる。彼は驚いたように見下ろしているのがわかり、泣きたくなった。ようやく人並みの恋ができると思っていたのに、こんなのってない。

「大丈夫か？」

「うん。だって、この心臓は健康そのものなんだから。病院でも太鼓判を押されたのよ。なんの問題もないって」

私の背中をさすってくれていた彼は、少し意外なことを口にした。

「心臓の提供者は男なのかな」

「えっ？」

「性別には縛られないんだよね？なんか、恋人に提供するというドラマも見たことがあるし、不適合だから別の患者へ回されるシーンも見たことがある。」

「あ、うん」

「いや、別にオカルトを信じるわけじゃないんだ。でも、持ち主が男性で、男にそうされるのを嫌がっているのかな、なんて」

彼はきつと、私をリラックスさせようとしているのだ。少し気持ちが楽になった。体を起こし、ここ数週間のことを振り返ってみた。

「そうかも。うん。そういえば、最近巨乳の派遣社員さんが来るようになったんだけど、彼女が通り過ぎるたびになんだか胸がドキドキするの。自分の体形と比較してコンプレックスを感じて胸が痛むのかな、なんてとらえていたんだけど」

「へえ、巨乳好きか」

彼も私も笑った。

「あと、そうだ。これまで会ったはずのない、取引先の人を見るたびに脈が早くなるのよ。最近、毎週のようにうちの会社へ来るんだけどね。なんていうか、逃げたいって思うの。足も震えてきちゃって、なぜだか不思議だった」

「女をいやらしい目で見るとなタイプ？」

「ううん。すごく優しそうな人だし、女性社員たちも喜んでお茶を会議室へ持つて行くんだけど。」

「じゃあ、提供者と何か因縁のある人なのかな？」

彼はベッドに胡坐をかいたまま考え込んだ。

「あるいは、因縁のある人物に似ているのかもしれない。そこまでいくと、なんだか具体的だね。」

「そうね」

「もしかして、彼のタイプは依子みたいな女性だったのかな」

「タイプ？」

「その男は危険だから近寄るなど、依子に警告してくれているのかもしれない。おれに対して拒否反応を示すようになったのも、嫌が

る依子に野外でキスをした時だよね。映画館でこっそりしたときには、なんの反応もなかった」

「ああ、うん」

少し胸は高鳴ったかもしれないが、あんな息苦しい思いはしなかった。

「俺が浮気をしたら、依子の家族に何か不幸が起こったら、心臓が教えてくれるかもしれない。依子のガーディアンは背中でも天でもなく、心臓にいるってね」

「ええつ。でも、私に好意を示してくれた男性なんて、一人しかないよ。しかも、いつの間にか連絡が途絶えてしまったし」

「連絡が？」

「そう」

彼は悲しそうに笑った。

「それもあるのかな。精神的なものというか……。彼に申し訳なくて、ほかの男性を受け入れられないとか」

「ううん」

確かにチヨコラのことは眩しい思い出だ。彼と一緒に生きたいと思ったこともある。だけど、今は違う。

「連絡が途絶えたときに、もう振られたって諦めがついているの。諦められたってことは、私のほうもそんなに強い思いじゃなかったのかもしれない。好きだった。でも、なんていうか、おままことみたいな恋だったかもしれない」

胸が痛い。

「彼のことはもういいの」

胸が、絞られるように痛い。

「大丈夫？」

「うん。今はあなたが一番好きよ。大好き」

胸が、主張するように痛む。私のことを思ってくれるのなら、守ってくれるのなら、彼との恋を成就させてくれてもいいと思うのだけだ。

ジユンに頼んで、チヨコラの今を調べてもらった結果、あまりに陳腐な、ただ運命を感じるような事実が判明した。

「数年前に事故で亡くなって、心臓・腎臓・網膜がそれぞれ移植のために取りだされたらしい。日時もわかるよ」

「私の手術と時期が一致するわ」

「じゃあ、ここにあるのは彼の心臓なんだね」

ジユンは私の胸に手をあてた。答えるように、心臓が大きくはねた。

「こんなところにライバルがいたら、俺は大変だ」

「そう？」

「そうだよ。『お前なんかといちゃつかせるため、俺は自分の命をあげたんじゃないぞ。依子の人生は俺のものだ』って言っているんじゃないかな？」

子供っぽい口調に、思わず笑ってしまった。

『依子を俺だけのものにするんだ』

いいえ。私が彼を自分のものに、自分の一部として取り込んでしまったのだ。なんて皮肉な。でも、本望じゃない？

「認めてもらうまで、気長に頑張るさ」

「よろしくね」

彼は小さくガッツポーズを作った。

温かなチヨコラという存在が、私の中にいる。私を生かし続けている。異物感はない。怖いとは思わなかった。

以来、私はチヨコラの心臓と暮らしている。それは、彼の過去に少しふれるということでもあった。きまりで、提供者の家族と連絡を取ることもなんてできないが、彼がドナーだという確信は強まるばかりだった。

「ああ。新明の知り合いなんですか。まいったな」

取引先の彼は声をひそめた。

「昔のことですよ。中学の頃あいつと同じクラスでした。ほら、あ

いつってお調子者のところがあつたでしょ？いじめの標的になつても笑つて平気そうな顔をするから、結構エスカレートしちゃつて。そう、俺は加害者側だつたんです。それも、首謀者です。」

「本当ですか？」

「はい。ああ、いや、今そんな話をここでぶちまけられたら、仕事に支障が出るんですけどね。あいつを階段から突き落としたり、財布を盗まれたと騒ぎ立てたり、便器に顔を押し付けたり、いろいろと。それでも、俺は教師の間で優等生として通っていました。そりゃあ、あいつが今の俺と会ったら、殴るだけじゃ済まないでしょうね。」

「そうですか」

「あいつ、今も元気にしていますか？」

今もここにいますよ、とは言えない。だから、私は曖昧に首を横に振った。

「私もずいぶん会っていないんです。でも、名前を聞いたことがあつたような気がしたんです。そんな事情があつたなんて、知りませんでした」

「あ、そうなんですか」

まずつたな、と彼の顔に書いてあつた。

過去の恥をすっかりさらしてしまつたその人は、私から眼をそらすようになった。

チヨコラが彼への復讐を私にそそのかすということとはなかつた。

心臓が行動を支配したら恐ろしいだろう。

むしろ、しばらくすると「逃げたい」「この人と関わりたくない」という気持ちは消えていった。いじめの加害者だつた彼を嫌悪する気持ちがある反面で、胸の抵抗は減つていったのだ。

「どうしてだと思う？」

「反省しているように見えた？」

ジユンは私の隣に座り、話を聞いてくれた。ぴったり張り付いていても、心臓が嫉妬することはない。彼を認めつつあるようだ。

「いいえ」

「厳しいね」

「ジユンも誰かをいじめたことがある？」

「いじめを黙認したことはある……かな」

「そう。私も、誰かを傷つけたことはあるし、謝られても許せないだろうと思うことはある。そういうものでしょ？」

「うん」

「誰かを許して成仏したとか、解放されたとか、そういう感じじゃないの」

私は胸を押さえた。

「じゃあ、物わかりよくなったんじゃないかな？」

「物わかり？心臓が考えるの？」

ジユンはぶつと吹き出した。

「心はどこにあるかだなんて、深い話をするつもりはないよ。つまりさ、『俺のつまらない恨みで、依子を縛っちゃいけないな』ということさ」

「ああ」

同意するように、心臓がはねた。

ジユンと結婚して子供が生まれると、胸が反応することは減った。考えてみれば彼も私と一緒に年を取っているわけで、いつまでも巨乳にむらむらしているのはいかなものかと思う。

「いや。男ってそういうものじゃない？」

と夫は言うけれど。

久々にあの高鳴りを感じたのは、子供を連れて有名テーマパークで遊んだ時のことだった。アトラクションに乗るまで90分待ち。日が照っていないからいいとしても、以前の私であればとても立っていられなかったはずだ。

「あー。私のポップコーン食べたでしょ」

「へっへーんだ」

「こら、喧嘩するのはやめなさい。こら、タツヤ。ロープに上るんじゃない」

前に並んでいるのは、子供を3人連れた家族だった。

「ユウくん。もう少しでちゅよ。お馬さんにのりましようね」

母親は、ぐずっている3歳くらいの女の子を抱っこし、優しく語りかけていた。私の娘もつかれたのか、夫の足にしがみついて抱っこをせがんでいた。その時だ。胸のあたりからあの高鳴りを感じ、笑いがこみあげてきた。

「え？」

「へ？」

思わず声を出してしまい、前の家族連れも振り向いた。夫に目くばせする。「もしかして？」

と好奇心に満ちた目を向けられる。

「あの、新明さんと言う知り合いはいますか？」

「え？ああ。ハルキのこと？」

奥さんのほうが大きく瞬きした。

「あ、たぶんそうです」

「知り合いなんですか？私は大学の同級生だったんですけど」

「幼馴染なんです」

「そうですか。あ、笑ったということは、私について何か聞いていたんですか？そっか、あのころの私は今と違ったからなあ」

彼女はくすぐったそうに笑った。

「よくわかりましたね。写真か何かかなあ」

私は曖昧に笑うことしかできない。

「イメージと違いました」

なんて、言ってみる。

「子どもの前なんで、あまりあまり詳しくは言えないんですけど、一時期半同棲状態だったんですよ。あのころは、「子どもなんていない。妨げにしかない。赤ちゃん言葉で話す大人を見ると虫唾が走る」なんて、ハルキ相手に偉そうに言っていたんで、今の私

を見たら笑うでしょうね」

なるほど、この胸から込み上げる笑いは、嘲笑ではないのだ。幸せそうな元カノを目にして、笑みをこぼしているのだろう。

私と出会う前、チヨコラと彼女が一緒に暮らしていた。その事実
に嫉妬しない程度には、私も幸せなのだろう。

それから？

あれは、家族でテレビを見ている時のことだった。あまり面白そうなバラエティ番組ではなかったけれど、音がなければさびしいのでつけていた。お笑い芸人が親にごちそうするという趣向の番組だったと思う。

「この人たちって、あまり面白くないよね」

「一般人の親まで引つ張りだすなんて」

と、夫と二人突っ込みを入れながら眺めていた。

何組目かの親子が映った時だ。私は胸を締め付けられた。懐かしい感覚だった。でも、彼が芸能人と知り合いだなんて思えない。夫も首をかしげた。

「ストロベリーキッドの高橋と、お父さんの茂さんです。茂さんは20年前、腎臓の移植手術を受けたそうです」

「初めての舞台があつた日、親父が倒れたんですよ。一生透析が必要だと言われて、こんなあほなことやってる場合じゃないって、目の前が真っ暗になったのを覚えています」

「どっかの親切な人が腎臓をくれたおかげで、こうやって息子におごってもらえるまでになったんですよ」

画面の中、司会者と親子がしゃべっている。芸人は目に涙を浮かべている。普段こんな話を聞いても、自分が移植を経験していても、簡単に心を動かされることはない。お涙ちょうだいの企画だなんて冷めた気分になったかもしれない。だが、なぜか、胸が熱くなるのだった。

「もしかして、彼の腎臓なのかしら？」

「わかるものなのかな？」

「でも、何か感じたんじゃない？」

胸を押さえると、温かな鼓動を感じた。

「ちゃんと使ってもらえているのね」

「君の心臓と同じようにね」

夫は目を細めて笑った。

きつと、チヨコラの遺族は気付かない。誰に移植されたかは知らないはずだ。芸能人の親戚に移植されたと知ったら、顔を合わせないままになってしまった彼の家族は、誇りに思うのだろうか？遺族が知らないことを、私がこっそり知っている。不思議で、でもどこか優越感を覚えるのだった。

外は雨が降っていた。雨粒に信号の光やコンビニの明かりが溶けて、たくさん宝石がフロントガラスを飾る。

「おばあちゃん。ルビーみたいだね」

保育園帰りの孫は、音楽にあわせて体をゆするのをやめ、ポツリとつぶやいた。

「きれいだよ。見てよ」

「何が？」

「ほら」

助手席の孫は、嬉しそうに窓を指差した。雲間から差し込む夕日が、水滴をルビーに変えていた。

「そうだね。ふふ。同じことを考えるものね」

少しおんぼろになってしまった心臓が、呼応するように跳ねた。運転中だから静かにしてくれと、こっそり胸に言い聞かせる。

「誰と？」

「秘密よ。今度、好きな女の子にルビーをあげるって言うてみたらどう？本物はいつかのお楽しみだってことにすればいいでしょ。」

「えー。手に持てないし、「バカじゃないの？」って言われちゃうよ」

孫はほほを膨らませた。

後（後書き）

数年で働けるようになるのかは知りません。そこはフィクションです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0908z/>

嫉妬する心臓

2011年12月3日14時51分発行